

茶の湯文化学会会報 No.7

第7号/1995年10月20日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

「茶・花・香」への誘い

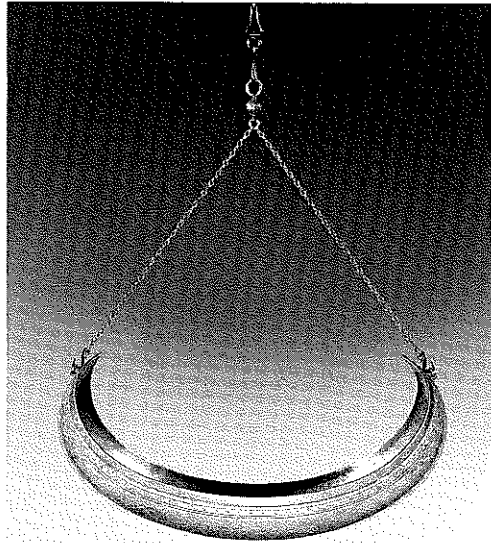
広島県立歴史博物館では、秋の企画展「茶・花・香」中世に生まれた生活文化」を、十月二十七日(金)から十一月二十六日(日)の会期で開催する。この企画展では、日本の伝統的生活文化といわれているもの

試みた。第一部の茶部門は、「唐風文化と茶」「喫茶養生記の時代」「唐物数奇」「飲茶の広がり」「わび茶の創造」「茶の湯の展開」の六つのパートからなる。「茶経」や『日本後紀』、

のなかから、茶・花・香を採り上げる。古代において仏教とともに伝来し近世において芸道として確立するまでを視野に入れながら、中世とくに室町時代における、茶・花・香の創成過程とその内容を紹介することにより、日本の伝統的生活文化の原点を見つめ直そうとするものである。

会場の企画展示室に入る

とまず目に入るのは、博多の町なかから一括出土した十六世紀の青磁香炉十一個と、京都市内から出土した茶道具や花器などの桃山陶器群五十点余りを並べた導入部。この企画展を象徴的に表現することを

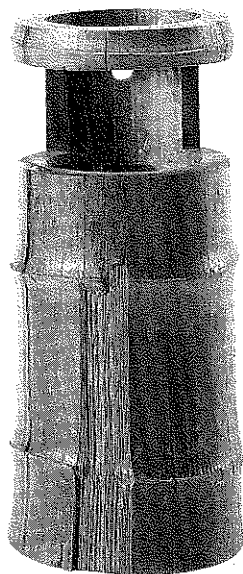


淡路屋舟花入 (野村美術館蔵)

『凌雲集』により団茶法の本伝来を紹介し、柴西と明恵の画像と『喫茶養生記』により葉茶法(抹茶)の伝来を紹介する。『喫茶往来』や禾目天目茶碗、古芦屋の釜などで唐物による闘茶会の様子をたどり、「淋汗茶の湯」や「服」銭から茶湯の広がりを知る。そしてわび茶の系譜を、村田珠光と武野紹鴨、千利休、千宗旦

等を書跡や所持品から紹介する。

第二部は花。「仏教といけばな」「座敷飾りの成立と花」「花伝書の登場」「立花の大成」の四つのパートからなる。薬師寺の花会式の紙製造花や重要文化財「金銅蓮



利休作 竹一重切花入 (名古屋市博物館蔵)

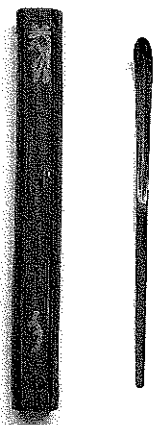
華華瓶」などから、仏教と花の濃密な関係を紹介し、「花王以来の花伝書」などの花伝書や様々な形態の花器により、立花や茶花の歴史を巡る。

第三部は香。香に関する展示例は比較的不い。本年、野村美術館や静嘉堂文庫美術館などで香合や香炉の名器展が行われ、話題になったが、香をテーマとする研究者が少ないこともあつて、香を歴史的に見る展示例は少ない。当企画展では、「仏教と香」「薫物の時代」「香道の創成」「香道の成立」「香道の隆盛」の五パートで構成する。柄香炉を持つ「聖徳太子像」や重要文化財の鍍銅三具足から仏

教と香の関係を紹介し、室町時代の火取香炉や伏籠から薫物が盛行した時代をしのぶ。三条西実隆や志野宗信、蜂谷宗悟等の事跡を示すことにより、香道の成立過程を紹介する。
この展示で言わんとしたことは、二つある。一つは、茶花香は同根であること。それらの起源はともに仏教に深く関わっており、座敷室町幕府において同朋衆が担っていた時代には、茶花香は一連一体のものであったのである。

いま一つは、中世に生まれた生活文化は民衆が創造したものであること。たとえば茶においては、千阿弥、村田珠光、武野紹鷗、千利休、花では立阿弥、池坊専慶、専応、専好、香では同朋衆、志野宗信、蜂谷宗悟。彼らはおしなべて皆民衆である。また中世における能・狂言などの芸能芸術の先駆も皆民衆であった。中世では、これらの文化において独創

的な民衆に為政者が近づいてきたのである。そのことによりまた新たな発展が生まれた。これら文化の担い手としての民衆の自負を、秀吉と対峙して譲らなかつた利休の自刃が、象徴的に物語っていると思う。
当館常設展示の主題は、草戸千軒町遺跡であるが、この遺跡から出土した遺物のなかにも、茶花香に使われた生活道具が含まれる。風炉、釜、花器、香炉。常設展示室においても、中世民衆の生活の息吹を感じて頂きたい。
会期中、茶・花・香それぞれの実演を行うとともに、神保博行氏(中央大学名誉教授)の「香の歴史」と題する開催記念講演会を予定している。



利休作 共筒茶杓 銘面影 (耕三寺博物館蔵)

第三回研究会報告

平成七年度の第一回研究会が七月二十日(日)、午後一時三十分より京都市左京区の京大会館で約七十名の参加を得て行われた。研究会も通算三回目になる。

京都は連日の猛暑で三十七度を越える日もあり、暑さもひとしお厳しいなかでの開催となった。

中村昌生会長の挨拶の後、戸田勝久氏の司会で始まり、小川後楽氏の「煎茶における清風について」及び矢ヶ崎善太郎・岡佳子両氏による「洛陽会東山大茶会について」の二本の研究発表が行われた。

小川氏の煎茶に関わる研究発表、矢ヶ崎・岡氏の庭園・茶道具の考察と、各ジャンルの充実した発表であった。

なお、第四回の研究会は平成八年二月十七日(土)、午後一時三十分より東京鳥居坂の国際文化会館で行われる予定になっている。

当会としては初めての東京で開催する行事ですので、関東方面の会員の皆様の奮っての参加を期待いたします。

〈発表〉

「煎茶における清風について」

小川後楽

梅樹軒東牛の「煎茶綺言」には煎茶道の始祖に石川丈山をおき、続いて平岩仙桂↓航屋一夢↓小川信庵↓高遊外↓八橋方庵を経て梅樹軒東牛に至る系図が収められている。

石川丈山始祖説については疑問を持たざるをえない。丈山は煎茶を嗜んではいたが、始祖とするほどの活動を行っていたわけではなく、諸煎茶書を換骨奪胎して丈山を始祖とする系図を作り、東牛みずから煎茶家として位置付けるために著した書である可能性を指摘したい。

次に煎茶における「清風」の語であるが、盧全の「茶歌」に出る語として名高い。「茶歌」については、すでに道教・老荘の影響が指摘されている。ここではさらに盧全の生き方自体ともあいまって、著名になったものと考えたい。

「直行の釣」の語でも知られるように、殺生を嫌い、洛陽郊外に隠棲して俗人と交わらず、世俗の価値観からも超越した生活を送った事、さらに甘露の変で処刑された事なども盧全の名声をより高いものとしている。

これまでの「茶歌」では「一椀喉潤…」の部

分が特に有名だが、むしろ、最後の「苦しんでいる民はいつになったら健やかな生活を送れるようになるのだろうか」と述べた部分により注目すべきであろう。
わが国でも早くから評価され、中世五山僧の詩文中にも盧全を詠み込んだものが見られるのは、これを示している。

江戸時代に入って藤原惺窩も「茶歌」を古今の絶唱なり」とし、続けて「夢は熟す周公高枕の上、要は須らく諫議の茶を啜るべし」ともみえ、「茶歌」のみならず盧全の生き方をも含めて評価しようとしていた。これらを含めて盧全を景仰する風が芽生えていたといえよう。

少し後になるが、「槐記」に見られる堯如法親王の言は注目される。「生薄茶もまいらせず、煎茶のみなり」とあり、その生き方と煎茶が結び付いた人物であった、と位置づけたい。

その後に現れるのが高遊外である。煎茶中興の祖とも仰がれる人物だが、この高遊外も「買茶翁偈語」に「盧全正流兼達磨宗四十五傳」と記しており、煎茶道の祖としての位置を確立したものといえるであろう。

〔発表2〕

「洛東会東山大茶会について」

矢ヶ崎善太郎・岡佳子

大正十年十一月十九日から二十二日までの四日間、京都東山周辺四十二か所ので、二千人の会員を募って大茶会が開催された。主催は松風嘉定を中心とする洛陶会。陶磁器業者、美術骨董商たちが業界の振興と感奮興起を目的とし、そのため(一)、仁清・乾山・木米記念碑並に記念茶亭の建築。(二)、東山大茶会の開催。(三)、上記三名工伝の刊行の事業を行う。としていた。

洛陶会を提唱した松風嘉定は瀬戸の人、十九才にして京都に出、二代嘉定の養子となり、輸出陶器、磚子などを製造して成功を収めた。さらに清水焼の振興を計るために茶会の開催を企画した。大正六年四月頃の事である。

茶会の会場となったのは、野村得庵の南禅寺別邸や藤田邸など一連の別荘群であった。特に藤田邸などはこの会に合わせるため、懸賞金をつけてまでの造園だったようだ。これらの別荘群のすべてが現存している訳ではなく、さらに当時と現状が変化しているものもあるが、残されているものを見ると、全体にわびた空間ではなく、明るく開放的なものであったようだ。

『庭園学講座』開催される

さる九月七日(木)から九日(土)にかけて、庭園学講座が開催され、全国から百名を超える方々が熱心に受講された。二年目を迎えるこの講座は、昨年に引き続き、京都芸術短期大学、京都造形芸術大学、京都地域リカレント教育推進協議会の主催になる。昨年は「遺跡庭園の調査と復元整備」をテーマに、基本的な考え方から応用までの総合的なカリキュラムが組まれたが、今年も「茶室と露地」がテーマとして取り上げられた。

この講座の主旨は次のように要約される。「侘び茶」の大成によって、目的が明確に限定され、限られた時間と空間のなかで精神的な緊張関係を演出する露地という新たな質を、日本庭園は包含するようになり、蹲踞、石灯籠、飛石という露地の構成要素が日本庭園を象徴するものとして普及していった。このような露地とともに茶の湯の空間を構成する茶室に焦点をあて、二つの基調講演と講義、川崎幸次郎氏らの解説による現地見学が設定された。また最終日には、茶の湯を日本文化史の視点から論じた上で、世界のさまざまな喫

あったようだ。東山周辺に別荘ができはじめるのは、明治三十年の山県有朋の山荘からであった。その後には都市構想のなかで景観保存が考えられ、山荘群が出来上がる事になる。結果的には数奇空間の建築が促されることになったといえるだろう。



第三回研究会

茶文化を通して見た日本の茶の湯文化についてのシンポジウムも開催された。京都芸術短期大学尼崎博正学長による開講主旨に始まった講座の内容を以下に記す。(敬称略)

■基調講演

日本の庭園と露地 龍居 竹之介
茶の湯のための空間構成 中村 昌生
露地の特質―

■講義

町家の坪庭と茶室の露地 日向 進
露地の成立と展開 仲 隆裕
小堀遠州の露地を中心に―
茶匠と道具 岡 佳子
―金森宗和と野々村仁清―

■特別講演

日本文化としての茶の湯 村井 康彦
パネルディスカッション
―さまざまな喫茶文化を通して―
司会 白幡 洋三郎
パネラー 村井 康彦
田中 淡
ウイーベ・カウテルト
川田 都樹子

この茶会で注目されるのは白木屋店主の大村梅軒、東京の根津嘉一郎ら関西ばかりではなく、東京、金沢、名古屋などの数寄者までが主席となっていた事である。

洛陶会はその後も活動を続けるが、昭和三年に松風嘉定が逝去し、大谷尊由が会長に就任する頃から数寄者が中心とした会に変化を遂げた。

この発表に対して、現洛陶会々員諸氏から様々な質問が寄せられ、活発な質疑応答があった。

最後に、東山大茶会の様子を伝える新聞記事の切抜きがコピーで、またその際野村得庵が使用した茶具がスライドによって紹介された。

発表者の募集

大会・研究会における発表者を募集しています。大会は一題につき報告二十分、質疑応答十分、研究会は同六十分・三十分程度です。発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡下さい。応募される方は八百字程度の梗概と研究会・大会応募の別を明記して、事務局へ提出して下さい。

新刊紹介

谷端 昭夫著 『チャート茶道史』

淡交社刊 二八〇〇円

茶の湯の歴史を学ぼうとする人に対して、チャートすなわち「海図」に相当するべく図版・年表・資料などを配置して、本文を補うだけでなく、チャート部分を通覧することによって、茶の湯の歴史的な流れがほぼ掴めるよう、また毎日一節ずつ読めば、大まかに一ヶ月で茶の湯の歴史に通曉できるよう工夫されている。江戸時代における茶の湯の展開に多くのページをさいているのも本書の特徴である。

熊倉 功夫他著

『史料による茶の湯の歴史』

主婦の友社刊
上 三三〇〇円・下 三三〇〇円

茶の湯の歴史を史料を通じて語ろうと試みた初めての書物。茶の湯の歴史を語るうえで重要な史料を紹介し、原文とともに読み下しと解説をつけてある。研究者の文章からだけでなく、生の史料からじかに茶の湯の歴史を読みとれる。

平成七年度大会予告

平成七年度茶の湯文化学会大会を左記のごとく開催します。

記

日 時 平成七年十一月十二日(日)

場 所 ホリデイ・イン別館

京都ホリデイホール

京都市左京区川端通北大路下ル

〇七五―七二二―三三三

当日会費 大会参加費(資料代を含む)

千円

懇親会費 九千円

次 第

受 付 十二時三十分より

研究発表(第一部) 一時〜二時三十分

飯島照仁/『松屋会記』にみる間中

板の一考察

―中間報告として―

森村健一/伝世品に見る呉須手香合・

盤・呉須赤絵の生産窯跡

―福建省漳州窯平和県南

勝五寮窯跡発掘調査成果

から―

谷 晃/『数奇の系譜』序論

―時に『山上宗二記』にお

ける数奇について―

コーヒーブレイク 二時三十分〜三時

研究発表 三時〜四時三十分

市村祐子/幕末明治初期茶道史への

一試論

―大坂町人大庭屋平井家

の茶会記を中心として―

美濃部亮/修行としての茶の湯につ

いて

―山上宗二記』を手がか

りに―

中村利則/大目構について

休 憩 四時三十分〜五時

記念講演 五時〜六時

講 師 /神戸大学教授

堀 信夫氏

演 題 /芭蕉と茶

懇親会 六時〜八時

大会の案内状を別途にお送りしますので、同封のはがきにて大会よび、懇親会への出欠をご記入のうえ十月末日までにご投函下さい。

事務局報告

*秋も深まり各地でさまざまなタイトルの展覧会が予定されておりますが、巻頭には広島県立博物館で開催される「茶・花・香―中世に生まれた生活文化―」展の紹介原稿をいただきました。このほか山口県立美術館では「はぎやき―破格と前衛の造形―」、岐阜県陶磁資料館では「大織部展」、徳川美術館では「かな―王朝のみやび―展」、京都国立博物館では「漆黒と黄金の日本美―蒔絵―展」、京都文化博物館では「桃山の春・光悦展―町衆の信仰と芸術―」など魅力的な企画がめじろ押しです。

*本号でご案内しておりますように、十一月十二日(日)に今年度の大会を開催いたします。

どういうわけか当学会の行事のある日は天候に恵まれないことが多く、今回はぜひとも良い天候になることを祈っています。

*今号には投稿原稿がなく、少し淋しい感じがします。当学会への要望、日ごろ茶の湯について思っておられること、お調べになったことなど、内容は問いませんのでどしどし投稿してくださることをお待ちしております。